

重度・重複障害のある子どもの国語科の指導について

○榊原 知恵
(長崎県立長崎特別支援学校)

○一木 薫
(福岡教育大学)

○古川 勝也
(西九州大学)

KEY WORDS: 重度・重複障害 教科別の指導 国語科

I 目的

特別支援学校では、重度・重複障害児に教科・領域を合わせた指導の中で国語科を指導していることが多く、教科別の指導として国語科の指導を展開しているところは先行研究を見てみても少ない。本校では、重度・重複障害のある児童に教科別の指導として「国語」の授業を設定している。絵本を主に取り扱いながら学習内容を展開したものを報告し、目標設定および指導内容の設定とその実践の成果について検討することを目的とした。

II 方法

(1) 対象児の実態

①知的障害特別支援学校の国語科の実態

対象児は肢体不自由特別支援学校に在籍する小4男児である。視線が外れるものの教師による繰り返しの関わりや絵本などに注意を向ける、筆記用具を親指、人差指で持ち、指先を動かして線を描く等の実態から見て、知的障害特別支援学校の国語の1段階相当の内容を学ぶ児童である。

②学習到達度チェックリスト(徳永 2014)からの実態とその解釈

国語のスコアは聞くこと8、話すこと8、読むこと6、書くこと8のスコアで、物を介したやりとり、音声による身振りや働きかけ、注意の追従をするような段階であることが分かった。このことから、次は言語指示を聞いて応答したり相互的なやり取りをしたりする力をはぐくむことが必要であることが明らかになった。

(2) 指導目標及び指導内容の設定

チェックリストの項目の中から次の目標となる段階意義を参考にして具体的な目標へ導き出した結果、4つの年間目標や指導内容が導き出された。(Table1)

(3) 時間割設定と単元設定、教材の選定について

授業は前回の授業でしたことを思い出しやすいように、子どもの学びを継続させ、月曜日から木曜日まで週4回1日25分の授業を帯でとるようにした。単元は、絵本を中心に設定し、最初に必ず絵本の読み聞かせを行い、その後に絵本の場面を絞って見る、声を出す、操作するなどの活動を取り入れた。以下、「聞くこと」「読むこと」に絞って示すと、「聞くこと」では、教師が声をかけると教師の方をちらっと見ることができていたので、より言葉を意識して聞くことができるように繰り返しのフレーズが出てくる絵本を選定した。また、生活の中でよく使う単語は理解している様子が見られるので、単語をさらに増やすために、話の中で知ってほ

しい単語が出てくる絵本を意識した。「読むこと」では、絵本を読んでいるときに、絵本を見ることはできるものの、すぐに視線が反れることが多かったため、興味を持ちやすく、どこを見ればよいのか分かるように絵や色がはっきりしているものを選定した。

(4) 手立ての設定

「聞くこと」では絵本の楽しさを感じたり、覚えてほしいフレーズをより意識したりするために、絵本を読む際には児童の反応を見ながら間をとったり抑揚をつけて読んだ。また、教師が声をかけるときは、目の前でゆっくりと言うようにした。「読むこと」では初めのうちは絵本の読み聞かせの途中でペープサートやぬいぐるみなどを見せ、絵本の中で特に見てほしいものを強調させるようにした。これらを見ることができたら、絵本の中の絵に注目できるように指導した。

III 結果及び考察

国語科の4つの目標をそれぞれ達成することができた。学習到達度チェックリストを見てみると、「言葉による簡単な要求に答えることができる」の行動項目が△から○になるなど、各行動項目の中で7割以上達成できたものが増えた。日常生活においても教師の言葉かけを聞いて、教師と視線を合わせながら返事をするできるようになったり、教師から挨拶されると、相手を見てすぐに「あ」と声を出して挨拶することができるようになったりした。

25分という短時間であっても毎日繰り返して指導できたことは児童の意識や意欲につながった。前日にしたことを思い出し、期待する場面が多く見られたり、徐々に話の内容を理解して話を楽しむ姿が増えたりしたからだ。クラス内の教師が教科としての視点で指導目標や内容と共通理解できたことで、どの教師もより明確な手立てや評価をすることができた。授業後に児童の様子を話し合う中でよりよい手立てを考え、それを次の日に即実行できたことも、児童の成長につながったと考える。言語指示へ応答したり、物を介したやりとりを通して自分から発信したりする力がついてきたので、今後は人とのやりとりを通して、自分から相手の注意を引こうとする力を高めることを目指していきたい。重度・重複障害の特性を意識して、授業時数や時間割の配当を検討したり、指導内容や方法を考えていったりしていくことで、重度・重複障害児に対しても国語科を時間の指導をすることが有効であることが示された。

※本稿の掲載にあたり、保護者の了解を得ています。

(SAKAKIBARA Chie ICHIKI Kaoru FURUKAWA Katsuya)

Table1 目標・指導内容・方法・手立て・評価

教科	観点	目指すスコア	具体的な目標	指導内容・方法	手立て	評価
国語	聞くこと (受け止め、反応)	1 2	・「○○をとって」「○○を箱の中に入れて」などの要求に答えることができる。 【言語指示への応答】	・絵本の一場面を実際にしてみる中で、教師から要求されたことに応える。	・要求は目の前でゆっくりと言い、教師に注目できるようにする。	・「○○をとって」と言われるとすぐに対象となるものを見つかわることができるようになった。
	話すこと (模倣、要求)	8	・自分のほしい物や来てほしい人に向かって手を伸ばしたり、声を出したりして伝えることができる。【音声や身振りによる働きかけ】	・絵本に登場する動物等のぬいぐるみを目の前で提示されると、手を伸ばしたり声を出したりして要求する。 ・絵本の中で繰り返し出てくるフレーズの一部を教師と一緒に言う。	・ぬいぐるみと握手したり、黙ったりする場面を設定する。 ・絵本の中で繰り返し出てくるフレーズを途中でやめると、続きを言うように「んー」と声を出すようになった。	・動物が出てくることを期待して出てくる方を見ながら「あー」と声を出すようになった。 ・教師がフレーズを途中でやめると、続きを言うように「んー」と声を出すようになった。
	読むこと (見ること)	8	・教師が指さした物を見ることが出来る。【物を介したやりとりの芽生え】	・繰り返しの言葉が出てくる本を教師と一緒に見る。	・初めのうちは指さしだけでなく、見てほしいところをたいて注目できるようにし、徐々に音の援助を減らしていく。	・見てほしいところを指さすと、集中して見ることができるようになった。
	書くこと (模倣)	1 2	・「ちょうだい」と言うと、相手の方を見て物を渡すことができる。【相互的なやりとりの拡大】	・絵本の一場面を肘の援助を受けながら実際にしてみる。	・「聞くこと」と関連させながら指導する。 ・渡すものは握りやすいように、滑り止めを巻きつける。	・教師が「ちょうだい」と言うと、すぐに物を渡すようになった。